

# 谷山茂博士蔵伴蒿蹊判『歌合』翻刻

清水 勝

## 解題

本書は、もと全十七丁（表紙を含む）の仮綴じの本であったと考えられるが、現在は、その上に表紙がさらに加えられている。大きさは、十六・五厘×廿三・七厘。題は左上に「歌合」と書付けて示し、右下隅に後人の加筆と見える「判詞・蒿蹊筆也」が書付けられている。表紙見返しと裏表紙には墨付が見られない。墨付は一丁表から十六丁表（即ち、裏表紙見返し）までである。一丁から十五丁迄は、それぞれ、表は七行に、左右の和歌を書き分け、裏は、二行から六行程の伴蒿蹊自筆判詞がある。十五丁裏の判詞の後に付いている総括部分も伴蒿蹊自筆である。なお、左右・勝負・和歌の本文などの各丁の表に記された文字は別筆によっている。また、一丁表には、「谷山蔵書」の印が加えられている。成立年等の記述はない。本書の歌人を、十五丁裏に見える総括の歌人名の順にあげると、光和・輔世・篤志・寿石・尚隆・好古の六人である。歌人名の順は、伴蒿蹊の何らかの意識があらわれている可能性がある。

右の歌人のうち、光和・篤志・尚隆の三人は、歌集・文集・人物

志・墓所一覽等にその名が見え、おぼろげながらその人物を知ることができるとができる。

光和は、西村光和。伴蒿蹊の家の集「関田詠草」<sup>注1</sup>にその名が見え、伴蒿蹊や僧六如らの親しい友人であったと推定される。<sup>注2</sup>

篤志は望月篤志。「関田詠草」・「関田文章」<sup>注3</sup>（巻五）「関田舎歌合」<sup>注4</sup>にその名が見える。伴蒿蹊の和歌・和文の弟子である。<sup>注5</sup>

尚隆は、「関田文章」・「関田舎歌合」に作品が見え、さらに、伴蒿蹊の追悼のために出版された蒿蹊自身の道歌集「続法のえ」に序文を添えている。蒿蹊高弟の一人であろう。尚隆は、「文化再版人物志」・「名家筆蹟考」・「類題若菜集」・「増訂平安名家墓所一覽」等々に名が見える。当時は著名人であったと考えられる。これらによると、又の名を師準、或いは号を繁堂、長松庵といい、通称を七観音院隠居といった。幼くして釈門に入り、国学を蒿蹊に受けた。文化十二年五十八才で没し、墓は真寺町妙心寺にある。<sup>注6</sup>

輔世・寿石・好古についてはよくわからない。<sup>注7</sup>

次に、「歌合」が成った年代については、本書にその筆記が見えないので、尚隆の文化十二年没五十八才ということから考えると、蒿



蹊の没年文化三年（一八〇六、七十四才）にはまだ四十九才であった。そう考えて、改めて、光和・篤志についてみると、光和は、伴蒿蹊と六如が庭前の桜を賞でにゆくような広大な邸宅に住み、彼らにふさわしい人物であったし、また、六如は享和元年没（一八〇一、六十八才。この年蒿蹊六十九才）であり、尚隆は四十四才である。とすると、本書六人の歌人は、年令順に羅列してあるように思われる。篤志も池水を庭にもつ人物として出てくるから、蒿蹊の弟子に多い富裕な又はかなり名家の人物と考えてよいであろう。尚隆の名は、中島棕隠が、まだ京都にいて伴蒿蹊に入門していたころの弟子の名として『錦西随筆』に記しているが、明らかに蒿蹊の歌文の弟子たる望月篤志の名は見えない。光和・輔世・寿石・好古が、もし蒿蹊に入門していたにしても寛政の中期以降といえる。かりに寛政七・八年以降と考えれば、蒿蹊晩年の約十年の間に「歌合」が成ったとしてまずまちがいはないであろう。もし、年令順に歌人名が記されているとすれば、はじめの光和・輔世は、蒿蹊と対等の著名人で友人、後の四人は弟子である可能性が高い。そう考えると、勝三首三人、勝二首一人、勝一首一人、勝なしの意味がわかるような気がする。勝数の順に配した可能性が全然ないわけではないが、上述の考え方がより正しいかと思われる。

蒿蹊晩年の十年は、寛政十年没の澄月・文化二年没の慈延（大愚）の二大旧派歌人と地下新風の小沢芦庵（享和元年没）らと並び、京都歌壇の長老として、しかも最も歌文に充実した活動をしている。国学では宣長・秋成らとともに称されていた時代である。そのような時に、秋成にも職人歌合をしようと申し入れていたことが「臆大

小心録」に見える。そのように蒿蹊の下で歌合が試みられた資料の一例として重要であると同時に、蒿蹊の和歌に対する姿勢だけでなく、特に人に対する姿勢がよくわかる点が興味を引くと思う。

すなわち、和歌の十五番までは、勝・持しか表記されていないが十六丁表の総括には、勝・劣・持・負と記されている。劣というのは大変珍しい。そこで、勝・持以外を負として一旦表を作成し、さらに総括の篤志負二首により、他を劣に移して表を再構成すると、総括の表記順「勝・劣・持・負」から、劣が独特な意味をもっていえることがわかるようである。つまり、劣・持の和歌と判詞を対比し、味わうと、劣とは、「勝ではないが、すこし劣り、対（持）」という程ではない」といった意味を持っていると考えられよう。そのように考えて、例えば、篤志の和歌を見ると、負二首あるも勝二首あり、そこから、歌人の社会的な評価や年令も考え、また若い人に厳しくなつて落胆することのないようになど、色々に配慮して、バランスを取っているように見える。さらに判詞を読むと、負を全然つけないでは歌合らしくないためであろうか、無理に負を置いた感すらある。

「閑田舎歌合」は歌人の数も多く、そのような配慮があったのかどうかかわからないが、この六人にあつては、確かに「劣」によってそれが言えるようである。「閑田耕筆」の伴資規（蒿蹊養子）の和文跋に、「吾かぞの翁つねの心淡しきからに筆すさびもまたあわし」とあり、伝記にも「為人篤厚温順ナリ」（嘉永六年刊「古今書画鑒定便覧」三）のような評をうけているのを真実の人物像として取ることができよう。



谷山本伴蒿蹊判『歌合』優劣表

以上、本書の内容にも触れて、私が興味を抱いた一・二の点について述べてきたが、本書は、近世後期の国学者の歌合資料の一である。

と同時に、京都歌壇を代表する歌人の一人、伴蒿蹊とその周辺を知る好資料といえるであろう。

右	左	光			和			輔			世			篤			志			寿			石			尚			隆			好			古			歌數
		勝	劣	持	負	勝	劣	持	負	勝	劣	持	負	勝	劣	持	負	勝	劣	持	負	勝	劣	持	負	勝	劣	持	負	勝	劣	持	負					
光	和	勝															⑬				⑫		⑫								④		④	3				
		劣																																				
		持																																				
輔	世	負																																3				
		勝																																				
		劣																																				
篤	志	負																																2				
		勝																																				
		劣																																				
寿	石	負																																2				
		勝																																				
		劣																																				
尚	隆	負																																3				
		勝																																				
		劣																																				
好	古	持																																2				
		勝																																				
		劣																																				
歌數		2			2			3			3			2			3			15×2																		

○印の番号は番数

勝>劣>持>負



歌合

判詞ハ萬蹊筆也

表紙

一番 月前霞

左

夕月のほのめくかけもあはれなり  
山のかすみのひとしへのそら

右勝

春のよのしつけき空の月影に  
あはれをそえて霞たなひく

左風情あしからすたし霞ハのひとしへならず

ともありなんや又此題にハ夕月  
のほのかなるよりもしつけき空の  
月たしかにて候へは右を勝とす

二番

左持

すむをのミめつるならひを春のよハ  
かすむを月の光りとそみる

右

長閑にもかすみへたて、春の夜ハ  
もるかけうすき月そ更ぬる

一ノオ

寿石

篤志

一ノウ

二ノオ

光和

尚隆

二ノウ

左案せられたりたゞを字多くて

となへにさハリ候か二句のをハもにしても

よし又霞むを月の光とハことわりいか、

あらん結句猶有へし

右四句迄ハよし月そ更ぬるの一句

猶有へし此番持とす

三番

左

長閑なる月のひかりやことハりの  
春のものとてうちかすむらん

右勝

さしのほる月のひかりもほのみえて  
山のはかすむ春の夜のそら

左作や、(う)きたかならず一首ハ艶に  
聞ゆれともしまらぬは不可也

右光ハとあるへし此かたまさり候らん

四番 垣夕顔

左

人とハていと、あれ行宿をしも  
もてかくさる、かきの夕かほ

右勝

三ノオ

好古

輔世

三ノウ

四ノオ

好古

光和



余所めには垣ねに咲るゆふかほの  
はなにうれたき宿とおもハし

四ノウ

左一首あしからねとももてかくすと  
なくてハ詞理透ひ候はつかなる事に候  
自他の差別大事也  
右難みえすかつへし

五ノオ

五番

左持

立よりてみてこそゆかめ夕白の  
さけるかきねハ草ふかくとも

輔世

右

咲かゝるしつのかきねに露ならぬ  
こゝろをそをくゆふかほの花

寿石

左右ともに正しく聞ゆ  
よき持なるへし

五ノウ

六番

左勝

中垣を越てさけともゆふかほの  
はなにめて、や人もとかめす

篤志

六ノオ

右

尚隆

ひまあらかきかほの草の露よりも  
たそかれいそくゆふかほの花

六ノウ

左心は聞ゆるを今少し四五の  
作やうと、かすとハ申へし  
右初五ハ何のためとも聞えず  
あしからねとも尚左少しは  
下は  
まさらんか

七ノオ

七番 夕雁

左

春いにし聲にかはらて秋霧の  
ゆふへに來鳴かりのつら

光和

右勝

行かたのまたはるかなる程みえて  
夕にいそく厂の一つら

輔世

左右とも哥のほと〇同しさに

七ノウ

ひたりハ春霞かすみていにし厂かねハ  
といふうたを少しかへたる斗也かくハ  
とらぬもの也

右ハ歸厂のうたに似たりまたはるかなる  
といふにて來厂とハ聞ゆ 此かた勝へし

八ノオ



八番

左

夕まくれ誰かたさしていそくらん  
雲路ミたれぬ厂の玉章

右勝

あまつかりたれをこひつ、夕暮の  
雲のはたてに鳴わたるらん

左○歸雁のことし又雲路にみたれ  
ぬとあるへきを字のあまれハかゝる

なるへし聞えず

右のかた尤勝へし

九番

左

夕まくれ天路をいそく厂金ハ  
くものいつこに宿りとるらん

右勝

鳴渡るこゑもかすかに天つかり  
雲のいつこそゆふ暮の空

左また歸厂のことしいかなれは

哥ことに此差別なきにやいふかし  
右のかたさしたる事ハなけれと

尚隆

寿石

八ノウ

九ノオ

好古

萬志

九ノウ

勝へし

此うたもしひていは、一二句をかへて下は  
夕くれの声とあるへき所也作やうを  
御思惟有へし

十番 朝霜

左勝

色もなき秋よりのちの小萩原  
ふる枝あらはにこぼる朝霜

右

さよすからさえし嵐の程みえて  
雪よりけなる庭の朝霜

左寒せられたりた、し四句ハ

古枝のあらハなるゆゑに朝霜の氷る  
かきたかにみゆる意か少しおほつ  
かなし

右難なしされと左も風情

あり力あれハまけかたし  
持とすへし

十一番

左

冬深くなり行まゝに朝なく

十ノオ

尚隆

好古

十ノウ

萬志

十ノオ



をきそふ庭の霜そ寒けき

右勝

輔世

けさハまたした行水も氷るて

霜をきわたすまきの板橋

十一ノウ

左難なし又さしたるふしも見えす

右下行水も氷るての取合よし

勝へした、ししひていは、横

の字おもハしからすこ、ハかりそめの

橋とみゆる風情也かやうの所ハ哥ことに

御心得あるへき事也

主ノオ

十二番

左

寿石

みしま江やいまハなかめも枯あしの

すゑこす風にさやく朝霜

右勝

光和

さゆるよの月の影かとまかひしも

しもに成ぬる冬の朝あけ

十二ノウ

風情ハ

左○あしからねともなかめといふ詞

おもくてこ、にハいか、又風にさやく

霜といふ事も聞えかたくや

右下句よくまゐりたり

尤勝へし

十三番 山家

左

篤志

山里のはなや紅葉の折くハ

人もとへかし道うとくとも

右勝

光和

心から入にし山の草の庵に

うきよの夢をなと結ひけん

十三ノウ

左あしからねと作やうと、かす尤

結局ハなくとも上にて聞ゆる也

右けにもとおほゆるさま也

かつへし

十四ノオ

十四番

左勝

寿石

花紅葉あたにうつろふ世の中の

うきをハよそに杉ふける門

右

好古

松風のよきにき、うきもいつとなく

ともとしなる、山の下庵

十四ノウ

左結句ことやう也杉たてる門と



有へし二句なと取より味よし

右二句の詞となへにさへる也たとへハ

かねの音とつかふ事ねの字かしましとて

不用といへり此未字ハまして

凡詞の唱へ御考えあるへし意も

あまりにことふりたり

十五番

左

山深ミ柴のいほりのしハくも

すてにし世をハなと忍ふらん

右勝

都よりほと遠からぬ山まとを

世のほかにして人もとひこす

左あしからねともしはくの置所

よからねハふと聞てハしはく捨る

といふことくにて心ゆかす

右山まとの窓無用也やまさとも

として結句人ハと有へし

勝へし

光和勝三首□一首持一首 輔世勝三首劣一首持一首

篤志勝三首負二首 壽石勝二首劣二首持一首

尚隆勝一首劣三首持二首 好古劣四首持一首

十五ノオ

輔世

尚隆

十五ノウ

右いづれも御出来ハよし此うち 古哥

新哥等類の事ハ深く考るに不及

凡此已外も等類ハ御社中にも 御吟味

互ニ御申廻しのうへ御除有へしもとより

野老記得せさるもあらんまたふと

思出ぬもあらんよりてわけて 申入候也

注

注1 伴蒿蹊没後二年の文化五年（一八〇八）、橋千蔭の序を讀う

て養嗣子資規が出版した。蒿蹊自撰。

注2 光和は、『閑田詠草』の一二二番・一二三番の歌の詞書に、

「西村光和が家の花を」・「同じ花を六如上人とともに見て」

と見える。和歌・和文の名家たる蒿蹊と唐詩風を排して宋詩

風を唱導して近世漢詩の流れを変えたといわれる六如がつれ

だつて訪ねるからには、光和も和歌も漢詩も詠じたり鑑賞で

きる、當時は名家の一人であつたのではないか。蒿蹊没前十

年前にこの『歌合』の成立を取つてもそれは言えるであろう。

西村光和について、『秋里龜島著「秘傳千羽鶴折形」について」

（昭和五十二年刊奈良教育大学『国文』一研究と教育一）等の

論文を出されている吉田正美先生は、名所図会の絵師とし

て活躍した西村中和の周辺ではないかとの御意見を下さった。

蓋し注目に値するものであらう。龜島は蒿蹊の弟子であるし、

田中訥言の如き絵師であつて蒿蹊の弟子もいるのだし、何よ



の課題としたい。

注3 萬蹊存命中の和文の集。享和二年刊。

注4 「閑田舎歌合」は、翻字と校注が昭和三十一年に梅村ふみ子氏・龍淵清子氏によってなされ、その原稿は現在近江八幡市立図書館に蔵されている。原本の所在は不明である。版本であったような特徴も見られるが、原文の翻字に力がそがれ、序跋や刊記等に全く注意が払われていないから、成立年等は不明である。辛酉年（享和元年）の年号をもつ歌合を含め、多くの歌人の中に正韶（池田氏）の名が見え、伴萬蹊一門と名所図会つながりの上からも今後の研究がひらける可能性がある。

注5 「閑田詠草」八九九番の詞書に、「望月篤志が庭に龜の出でしを祝ひて」と見える。また、「閑田文章」巻五（巻五のみ門人文集）の三番に、「花のことば」という一文をとられている。望月篤志は和歌・和文両方の弟子であったと言えよう。

注6 尚隆は、中島棕隠の「錦西随筆」には、「東山伽羅観音の寺主」と見えている。なお尚隆は、「閑田文章」巻五の冒頭に、「水」の題で一文を取られている。

注7 輔世は、宝暦六年（一七五六）に真淵門に入門した福島福雄（通称長民、藤原姓、医師）であろうか。考えるに、千蔭・春海すら伴萬蹊には、ほとんど師礼を取っているのだから考えられぬことはない。

寿石は、京都に住み、寛政六年に浪速の加藤景範に入門した片山寿石かも知れない。だが、注2にのべた訥言の如き、

かなり活躍した絵師も萬蹊の弟子となっていたから、狩野寿石かも知れない。たゞ狩野寿石は三人おり、文政十三年に四十九才で没した寿石が年令的には合うが、少し若いかと思う。好古は、六人、それらしい人物を挙げることができるが、中に、可能性が高そうな人物としては、寛政四年に四十三才で宣長に入門した樋口好古を挙げておくべきであろう。ちょうど田中大秀が、和文は萬蹊に、国学は宣長についたように、樋口好古がそうであつてもおかしくはない。しかし輔世・寿石・好古は後の参考の為にあげた。

注8 □印は、才偏の部分を書きさして「一首」と続いている。この「□一首」は書きなおしたのであろう。下の「持一首」が、歌数から正しいと思われる。

#### 付記

谷山茂先生が、「歌合」をお見せ下さったのは十七年前であつた。十五年たつて、近江八幡市立図書館で口頭発表し、その後も谷山先生に御指導をいただき、阪口弘之先生の御教示もいただくことができました。又、加えて、井手至先生の特段の御教導を賜わると同時に、国語国文学科の先生方に色々な形でお世話になりました。また、勤務校の吉田正美先生にも示唆に富む御教示をいただきました。有難うございました。今後とも多少なりとも、御意見等いただきましたら幸いです。

平成二年十一月三十日。

平成三年二月廿四日改稿。

（大阪府立和泉高等学校）